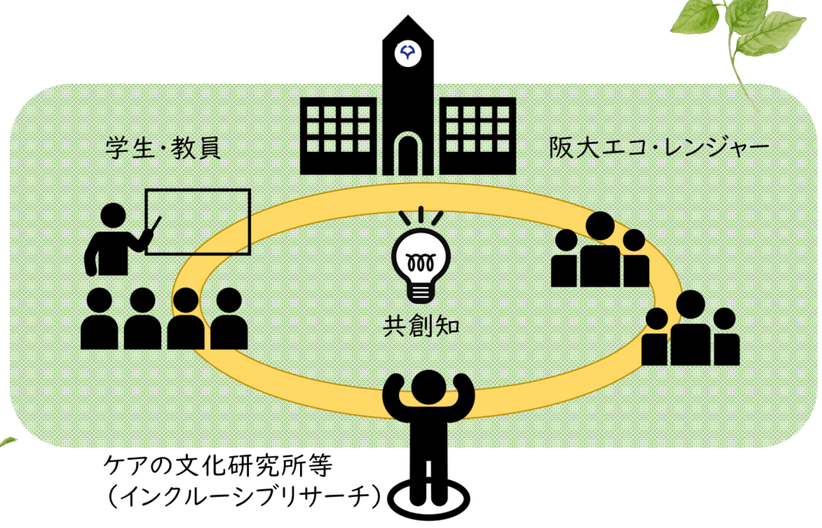
障害ラボ ー 阪大エコレンジャーとの協働活動・研究

障害ラボとは、

障害のある人たちと協働した活動や研究の方法を探求しています。
大阪大学のキャンパスをフィールドに、障害のある人との協働した活動や研究を介して、「共に生きる」ための共創知を生みだすことをめざします。
2019～2022年にかけて、大阪大学で環境整備の仕事に従事している、主に知的障害のある職員「エコレンジャー」と一緒に取り組んでいます。

（プロジェクトメンバー）
総務部人事課　服部圭一課長、ｷｬﾝﾊﾟｽﾗｲﾌ健康支援ｾﾝﾀｰ　太刀掛俊之教授
工学研究科ﾋﾞｼﾞﾈｽｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ専攻　加賀有津子教授、人間科学研究科　モハーチ・ゲルゲイ准教授
社会ソリューションイニシアティブ（SSI）今井貴代子特任助教
人間科学研究科附属未来共創センター石塚裕子講師（ラボ責任者）
【連携団体】
ケアの文化研究所（http://caringsociety.net/lab/）



キャンパス調査・マップづくり

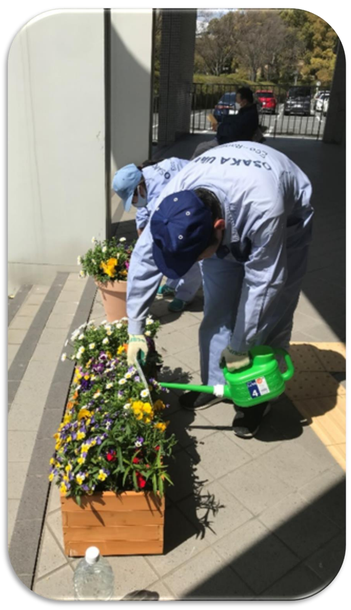
清掃業務を通じて、キャンパスの隅々まで知っているエコレンジャーの視点で、キャンパス内の気になるところを写真で記録し、マップの作成を行いました。インスタントカメラを用いて“すぐに”形にする工夫をしました。

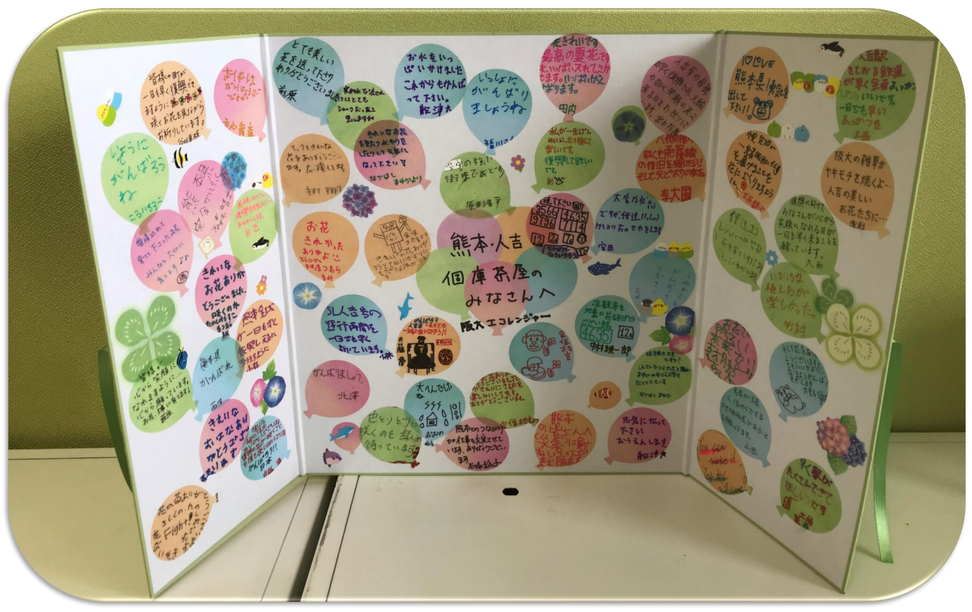
参加は、公募申し込み制とし、在席職員28名中、1回目は9名参加、2回目は5名参加（リピート率44％）でした。

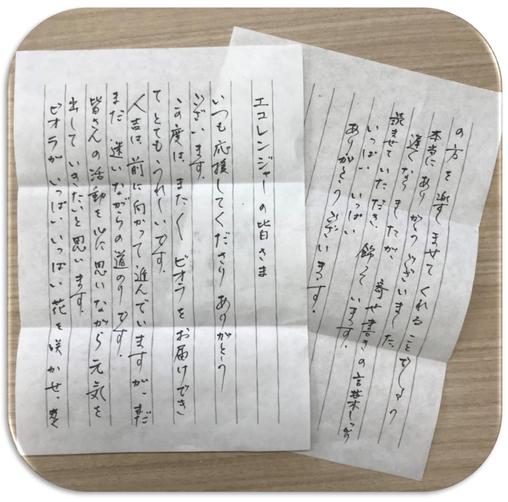
楽しいところ、気持ちのいいところの写真が圧倒的多く、「休憩できるスペースがあるところ」、「花や緑がきれいなところ」、「いつも清掃業務できれいにしているところ」などが記録されました。

エコ・ガーデン活動

大阪大学人間科学部・人間科学研究科50周年事業に向けた潤いと賑わいづくりの一環として、人間科学研究科の東館と正面玄関にフラワーコンテナを設置しました。
本活動は、エコレンジャーの業務として導入が望まれる「園芸作業」の試行期間として位置づけ、花の植え替え、土のリサイクル、日常の維持管理（水やり）をエコレンジャーの業務として行っています。
コミュニケーションが苦手なスタッフも業務を通じて、学生や教職員と自然な交流が生まれる機会となることを期待してます。
「半分開いて、半分閉じたセーフティな作業の場」をめざしています。







2020年の豪雨で被災した熊本県人吉市から、お花の苗を購入し、エコ・ガーデンの活動が、彩を添えるだけでなく、被災地の復興にも役立てています。
被災地を応援しようと、スタッフ全員で寄せ書きをし、人吉市のみなさんに送りました。人吉市からお礼の手紙が届き、被災地との小さな交流も生まれています。

エコレンジャー活動報告会

エコレンジャーの業務や活動を広く知ってもらうため2022年10月28日に活動報告会を開催しました。
公募による7名の有志が、1ケ月かけて準備をして、報告を行いました。人間科学部の学生、教職員、35名の参加がありました。
「清掃のいろいろなスキルをもっていることがわかった。」、「私たちが全く知らないキャンパスのことを知っている。」など、エコレンジャーの経験や知識を知る機会となりました。
そして、終了後も参加した学生との交流が続き、「今度、キャンパス内で見かけたら挨拶します」と新たな関係が生まれていました。

考察

多くの大学で、障害者雇用率を達成するために、知的障害者の計画雇用が行われています。大学が持つリソースを活用して、さまざまな機会を設けることにより、知的障害者が表明しにくい（していない）仕事へのニーズの探求や能力の向上の機会となる可能性が確認できました。
大学における知的障害者の就労は、障害者の就労の二分法モデルから対角線モデルへの移行を探求する場として位置づけていく必要性があると考えます。
（詳しくは、QRコードよりレポートをご参照ください）